



素晴らしい対談

— 古代ローマにオーケストラがあったら……

お正月休み、たまたまNHK BSで「スイッチ インタビュー」という深夜番組を視ました。それは、2022年からNHK交響楽団の首席指揮者に就任したイタリア出身のファビオ・ルイーダさんと、イタリアでも評判だそうです。漫画の『テルマエ・ロマエ』の作者のヤマザキマリさんの対談。素晴らしい対談でしたので、紙幅の許す限り、そのまま紹介させて頂こうと思います。

「オーケストラはたくさんの個性の集まりですよね。仲が良くなかったりとか、誰と誰が浮気しているとか、そういうこともあるかも知れません。ただ、一緒になったときに素晴らしい交響楽を奏でることができるってのは、私はとてもいいことだと思って何時もオーケストラを見るんですけど」。

「オーケストラと向き合うとき、私は自分の個性を主張しないようにします。作曲家の思い、ねらいを尊重するよう求めると、オーケストラはついてきてくれるのです。私個人の考えで、楽団員を振り回すことはありません」。「オーケストラはまったく違う個性の集まりです。フルートが上手な人、クラリネットがうまい人、並外れたバイオリニスト、みな自分の音を持っています。私は彼らを受け入れ、作品全体に合わせていかなければなりません」。

「ファビオさんはいろんな国の、いろんなオーケストラを指揮していらっしゃると思うんですけど、これは日本の特徴だなと思うようなものってありますか」。

「最初に来たときは、私も若くて未熟でした。音楽的にはまったく問題はなかったんです。ただ、日本人の行動様式に戸惑いました」。「どんな人にも距離を置いているように見えました。でも、それは日本の習慣で、相手を尊重する気持ちの表れであると気づいたんです。相手に近づかないのは嫌いだからではなく、相手に対する尊敬の念が失われそうだから。それが私にはとても素敵なことだと思えて、日本の人が好きになりました」。

若くしてイタリアに留学し、イタリア人と結婚し、時々帰国するというヤマザキさんは言います。「日本に来ると、すごく小さな仕事でも誇りをもってやってる人たちっていうのが目につくんですよ。ホントに謙虚な仕事なんだけど、でもホントにこやかにきちんとサービス精神をもってやっている人たち」。

ルイーダさんは応じます。「日本人は自分自身のことや自分のやっていることに誇りを持っている。その根底には、自分の行動が他の人のためになっているという自負があると思います。それは一種の利他主義ではないでしょうか。カトリックの『利他』は、私が『あなた

を助ける』こと。しかし日本では私が『皆の役に立つ』ことなのです」。

圧巻はお二人が語る社会論・文明論でした。

「私が古代ローマと日本の比較文化論のような漫画を描いているのはすごく共有できる何かを感じているからなんです。例えば属州として広げた土地に自分たちの持っている技術を広める、勿論それは属州となった国を取り込むための戦略でもあるんだけど、でもあれだけ大きくなった理由にはそういった利他性というものがあるのかと思うんですけど。ファビオさんて古代の世界史がお好きだって伺っているんですけど、そういうことをお考えになられたりすることはありますか」。

「古代ローマはローマ人という集団によって築かれた文明です。当時の作家たちは古代ローマの根底にある『民衆の力』を強調しました。古代の法律『ローマ法』は現在世界の法律の基礎となっていますが、個人ではなく集団、共同体を保護するために生まれ、発展したものです。古代ローマの衰退が始まったのはローマ法に『個人』の概念が加わったときからです。時とともに集団・共同体よりも個人が重要視されるようになり、古代ローマは崩壊へと向かったのです」。

「個人主義的なものもあれば、組織として成り立っている、このバランスというものをどういうふうにまとめていけばいいんでしょうねえ」。

「個人の自由はとても重要ですし、軽視すべきではありません。しかし、各個人は社会の中での自分の役割を自覚すべきだと思います。今の世の中は『私が、私が』ばかりで、『私たち』という言葉が減っています。あまり良いことだとは思いません。人生は常に妥協の産物です。妥協するから自分も周りも自由でいられるのです」。

「それが利他主義につながってくるんですね」。

「ええ、利他主義とは集団の中で自分の役割を理解することです」。

「古代ローマの慣用句でクレメンティアってあるじゃないですか。要するに寛容性、寛容であれって。音楽を弾く人たちは、その寛容性がなければ多分できない職業だと思うんですね」。

「間違いないですね」。

「ということは、もし古代ローマにオーケストラがあったら、いいオーケストラができましたか」。

「私は、そう思いますよ。古代ローマにオーケストラがあれば、素晴らしいオーケストラだったでしょうね」。

copyright NHK

[>前のページへ戻る](#)